

英語小テストの英語力向上への有効性

吉野 美智子

中学校・高等学校教諭Ⅰ種免許状(英語)取得のため、筆者が担当する英語科教育法Ⅲ、Ⅳでは模擬授業が必須となっている。通常3年次生の春学期に英語科教育法Ⅲ、秋学期にⅣを履修する。英語教育史で始まるⅢでは、参考となる英語授業のDVDを1つ視聴した後、模擬授業が始まる。この授業ではいきなり45～50分の模擬授業を組み立てるのではなく、**warm-up**と**review**；語彙の導入と指導；文法・文型の導入；文法・文型の練習と発展活動；本文の読解指導；教育・教材・ICT等を活用した授業(コミュニケーションを主眼とした内容)¹、と一つの授業を分割し、それぞれの区分で10分間授業を行うこととしている。

これは以前まで英語科教育法Ⅲ、Ⅳ(以下教育法Ⅲ、教育法Ⅳと表記)の教科書として使用していた『新版 英語科教育実習ハンドブック』に「授業のくふう」として紹介されている様々な指導方法を知るだけでなく、できるだけそれら複数の指導方法を実践し、秋学期に行う、50分間の模擬授業で取り入れられるようにすることを目的としている。使用する教科書は実習予定校が使用している教科書を配布し、それをういて行う。3年次生の段階では教育実習校でどの学年を担当するのかが不明であるため、自分が苦手とする文法項目の箇所を選ぶよう指導している。教育法Ⅲでは基本的に最後のコミュニケーションを主眼とした模擬授業以外は、**warm-up**から本文の読解指導まで、基本的に一つのレッスンで成立する流れになるように指示をしている。まだ指導案作成に慣れていない段階であるため、部分ごとに作成させていくことができ、五回目の本文の読解指導で1時間の授業の指導案を作成したことになる。

秋学期の教育法Ⅳでは前半に参考とする数本の英語授業DVDを視聴した後、評価に関する授業を経て、50分の模擬授業を順番で行なっていく。例年この授業を履修する学生は4、5名であるため、50分の授業を二回行い、本学の外国人教師にALTの役割として入り、15分のペア授業を一回行う。

学生は教育法Ⅲ、Ⅳどちらの場合も指導案を初稿、完成原稿の二回提出する。模擬授業をする1週間前までに初稿をGoogle classroomに提出し、教員からの添削を受けたものを訂正し、完成原稿として模擬授業を実施する数日前に同classroomに提出する。模擬授業を終えた際に評価票を学生に渡し、次の授業への改善に繋げることを促している。その評価票には指導案の初稿、そして添削をもとに訂正がなされていたかも評価の一つとして含んでいる。当初は指導案提出は一回のみとしていたが、模擬授業の機会を最大限活用するために初稿、完成原稿という二回の形式に変更した。

学習指導要綱が平成29年に告示され、外国語教科の目標について、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にする観点からの改善・充実となった²。グローバル化社会では外国語によるコミュニケーション能力が生涯にわたって多様な場面で必要とされることを想定し、平成20年改訂の学習指導要領で小学校から高等学校までの一貫した外国語教育により、言語や文化への理解を深め、外国語でのコミュニケーションへの積極姿勢、情報等を的確に理解、伝達する力を身に付けさせることを目標として掲げられた。小学校の外国語活動により、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成され、

¹この区切りは『新版]英語科教育実習ハンドブック』の区分けから行なっているためこの名称にしているが、学生らはスマートフォンやPCでのプレゼンテーションツール、また教科書が提供するインターネットを介した音声、視聴資料の使用を模擬授業での様々な箇所ですで行なっているため、実際はコミュ

ニケーションを主眼とした内容にするように指導している。

米山朝二、杉山敏、多田茂『新版]英語科教育実習ハンドブック』、大修館書店、2013年。

²『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』文部科学省、pp.5-7。

授業での教師の英語使用や生徒の英語による言語活動の割合などが改善された一方で、中学校の授業では文法・語彙等の知識習得に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組が十分ではないこと、複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題が指摘されている。これらを踏まえ、語彙や文法等の個別の知識の定着に焦点を置くのではなく、知識・技能を実際のコミュニケーションで活用することが求められるようになった。

以上のように、英語での授業を前提とし、またコミュニケーション活動を授業で活用する授業が行われている学校で教育実習を行うため、教育法の模擬授業でも教師が積極的に英語を用いることを求めるようになった。学生が授業で視聴する DVD では教師が大半を英語で行う授業を見せ、授業進行の仕方と共に、どのような指示、説明を英語で行うのかの例として

している。また教育法のテキストに載っている

教室英語の例、図書館所蔵の教室英語を紹介している書籍を参考にしよう指導するとともに、適切な表現が見つからなかった場合は

大学の外国人教師に尋ねるよう指導している。また模擬授業内でプリント等で使用する英文は教科書、辞書からの抜粋にするよう指導している。間違った、あるいは不自然な英語表現を授業で多用すると、生徒もそれに倣う恐れがあるため、できる限り適切な英語表現を用いるよう教育法の授業では繰り返している。このような指示を与えるのは、ほぼすべての学生が参照をせず、教室内での指示、例文等を自分で作成することが続き、大小の間違いが頻発するからである。

指導案初稿の段階で間違いを指摘し、基本的には自分で直すよう指導している。しかし、例年、変更したものの依然として間違っているもの、間違いを訂正もせず、そのままにしているものなどが程度の差こそあるが続く。特に間違いとして多いのは前置詞、冠詞の間違いもしくは脱落である。中には進行形、受動態等で be 動詞が脱落することなどもある。学内で行われる TOEIC Test のスコアで平均以上を取ってる学生でも見られることがある。

ある年の教育法 III での指導案の初稿に見られる間違いを表にしたものが表 1 である。

表1

		固有名詞 大文字/文 中大文字	不適切な 単語	前置詞間 違い	冠詞間違 い	不適切な 表現 (文 法不成 立)	抜け				
							接続詞	目的語	表現	冠詞	前置詞
二 回 目	A	2	2				1	1	1	1	
	B	1						1			
	C									1	
	D					1					
	E		1						1		
三 回 目	A		3						1		1
	B					1					1
	C		2						2	2	
	D										
	E		1	1							
四 回 目	A		3								1
	B						1		2	1	
	C		5			1	1				
	D		2								
	E		4	1		2			1	1	

A-D は実習予定校の中学校の教科書を使用し、E は実習予定校は高等学校であるが、この段階では確定していなかったため、中学校の教科書で模擬授業を行っている。各学生が選択した学年、文法内容等に差異がある。A は 2 年生、B は 1 年生、C は 3 年生、D は 1 年生、E は 2 年生である。三回目の D に数値がないのは、教員による添削済みのファイルが学生が誤って削除してしまったため、確認ができなかった。また A の間違いが目立つが、A の指導案での生徒への指示は英語が基本となっており、アクティビティの説明や例から、文法説明で必要な箇所以外は英語で行なっている。B も指示、説明で英語使用を心がけている。一方で、Close/Open your textbook. といった指示のみをもつばら使用する学生もいる。また添削箇所が訂正できていなければ、模擬授業評価に含まれる指導案の点数から減点される、ということもあり、かなりの箇所で生徒に提示する例文を含め、英語表現がおかしいと指摘され、訂正した指導案では指導内容が全く変わっていた例もある。

図 1

New Crown 3, Lessons 6 and 7 名前

私の夢はタイム・マシンを発明することです。もし私が一つ持っていたら、時を越えて偉大な発明家たちを訪ねるでしょう。それが私が長い間考えていることです。あなたは私を夢想家と思うかもしれませんが、全ての新しいことは夢として始まるのです。私は過去の夢想家たちから未来のための新しいものの造り方を学んできたのです。今日、誰も飛ぶことを考えていません。それは新しくも、特別ワクワクすることでもありません。それは常にならざるを得ないものでした。何世紀の間、空中を移動する夢は Leonardo da Vinci のような発明家の関心を引きました。彼は考えました、「鳥のように飛ぶことができれば、彼を他の人たちは驚かすでしょう。彼らは鳥の中の羽を観察しました。次第に彼は飛行の秘密をいくらか学んだのです。

私の外国人のお客たちはいくつかの提案をしました。夕食と朝食に料理の選択をしたい人もいました。洗濯機と無料Wi-Fiが欲しい人もいました。これらの考え全てが私には新しいことでした。私はいくつかの提案をし、それらは効果がありました。私のお客たちは以前より満足しました。それだけではなく、外国のお客が今までよりもっと来たのです。言語は新しい考えを発見する手段です。外国語はあなたの心を広げることができます。

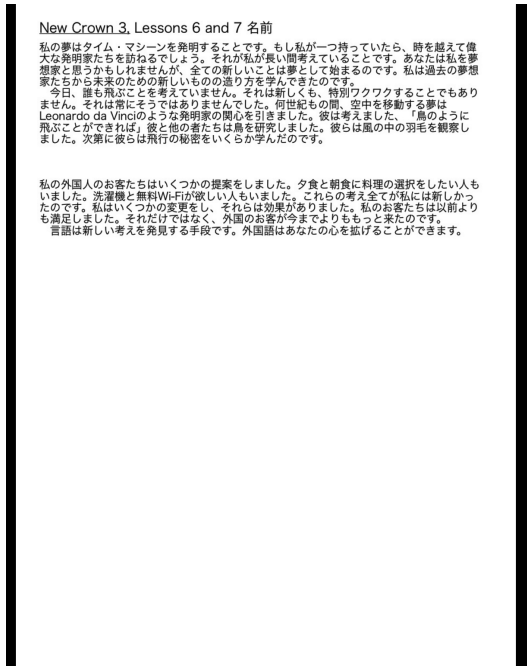


表 1 から顕著なのは「不適切な単語」の項目である。これには handout とすべきところ

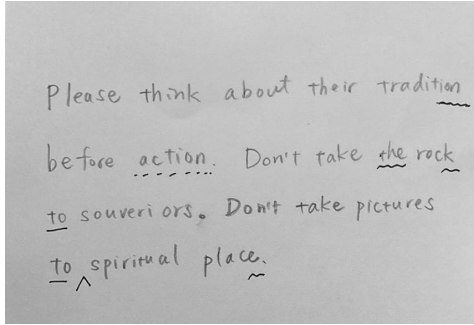
を a paper としているもの、“Introduce your idea to your pair.”といった単語レベルから、“What plan did you narrow down to?”といった、一語以上の間違いも含まれる。そのため、模擬授業で使用する英文、内容が変わると、新たな間違いが加わるため、4 回目が終わった段階でも依然として不適切な単語、表現の数は高いままとなっている。一方、必要な単語、表現が脱落している（表では「抜け」と表現）事例は数の上では減少していているが、これは教育法 III の授業時間は各自 10 分であるため、注意を配りやすいと考えられる。しかし、こちらでも同様の間違いが繰り返されるため、単語、表現の脱落に自分で気づくことができるようになるのを目的として、秋学期からの教育法 IV では基本的に模擬授業開始からの毎授業で小テストを実施した。小テストは実習予定校で使用されている教科書の英文を書くものである。毎回のテスト範囲は 1 年生の教科書から始まり、2 単元ずつ出題され、そこから 2 箇所出題される。高校教科書の場合は英文の量から、毎回 2 ページずつの出題範囲とした。テスト用紙には該当箇所の日本語訳が書かれており、それらを英訳することが問われる。使用する単語、文法が分かりやすいよう、意識ではなく、逐語訳での出題である。学生には小テストの目的として、指導案、模擬授業で見られる英語の間違いを極力なくすため、模範例として教科書の英文を暗記して解答するように伝えた。図 1 は小テストの例である。

暗記をせず、その場で英作文をする学生もいた。D と、教育法 IV からは高校の教科書を使用している E とに顕著で、当該単元で学習する文法項目が使用されなかったり、わからない単語が脱落することを始め、前置詞や冠詞の間違いが頻発した。

この小テストでは点数は学生には提示せず、間違えた箇所を不適切な表現、単語等が抜けている箇所などマーカーで指摘を加えた。小テストは翌週の授業で返却し、自分が特にどのような間違いをする傾向があるのか、についての気付きを促すものとした。学習者が教師からのフィードバックを通して、言語への認識と言語の正確さを身につけてい

くこと³を目的としている。学生には小テストは授業評価に加えられることは明言し、マーカーをつけられた箇所は減点対象になることを通知している。画像1は実際のマーカーの例を再現したものである。

画像1



減点対象は表1に記載してある箇所のうち、文として意味をなさなくなる間違いは-1、そのほかの間違いは-0.5、同種の間違いは-1を最大とした。10回の小テストの結果を100として、A、Bは合計で8割以上、Cは7割、Dは6割、Eは7割弱であった。

教育法IVでの指導案に見られる英語の間違いについて表にしたものが表2である。Aは一回目の模擬授業指導案では不適切な表現と

しては“Decide the first person. Play Jan-ken. Winners go.”といったもので、他は定冠詞、冠詞の間違い等であった。Bの場合は不適切な表現では“These papers to the back.” “Let’s go the scenes 1.”といったもので、“But he doesn’t it.” “Can you translate into Japanese?”といった動詞や目的語の脱落が見られた。Cでは“What do you mean in Japanese?”や“Please spell up on the blackboard.”などの不適切な表現が見られた。Dは不適切な表現として、“I will play the CD sounds 2 times.” “Listen carefully and thinking the meanings.”などが見られ、“Please change to English.”や“I was 3rd grade in an elementary school”といったような、目的語や冠詞の脱落があった。Eは“Before I start this class, I’ll tell you the interesting English idioms.”や“Here is some written words.”といった不適切な単語、表現が含まれるものの他に、“You need add verbs, and make the passive sentences with these words.”や“Students are taught by a man.”といった、冠詞の間違いが目立った。

小テストを5回以上終了した時点で2回目の模擬授業が行われた。Aの間違いは目覚ましく減少し、“This is a book which Soseki wrote.”といった、授業のポイントとなる文法

表2

		固有名詞 大文字/文 中大文字	不適切な 単語	前置詞間 違い	冠詞間違 い	不適切な 表現(文 法不成 立)	抜け				
							接続詞	目的語	表現	冠詞	前置詞
1 回 目	A		1		1	4			2	1	1
	B					5		3	2	4	3
	C		6			3			1	1	1
	D		3			1	1		1		
	E		6			4				2	
2 回 目	A				2					1	
	B		3			3			5	2	
	C	学生が添削されたファイルを誤って削除したため、不明									
	D		5			1			2	3	
	E		10	2					1		

³ Jack C. Richard’s and Theodore S. Rodgers, *Approaches and Methods in Language Teaching*,

the third edition. Cambridge University Press, 2015, pp.121-122.

項目ではあるものの、冠詞の間違いくらいであった。Bは各国の擬音を紹介する際の表現で、“People who use English use hahaha.” “Which country does this use?”といったものがあり、また“Switch role a second time.” “Tell me words you heard.”といった冠詞の間違いや脱落が見られた。Dは“The goal is cover three squares in a vertical.”といった表現のほか、“Ema is key word.”や“Did you enjoy?”といった冠詞、目的語の脱落が見られた。Eでは文脈に合わない内容の文や、“I’ll check whether you will do your homework or not.”といった時制が間違っている文の他、“Santa Claus will give like this present.”のように目的語が脱落している間違いがあった。Cは表にあるように、学生が添削済みのファイルを誤って削除してしまったため、どのような間違いがあったのか不明である。

各学生が模擬授業で取り上げた教科書単元は、Aは中学3年生の4つ目の単元で、Bは教科書はAと異なるが、同じく中学3年生の7つ目の単元であった。CとDが使用した教科書は同一のものであったが、Cは中学2年生の6つ目の単元を取り上げたのに対し、Dは中学1年の3つ目の単元であった。Eは高校一年生を対象に文法をターゲットにしたテキストの12番目の単元を取り上げた。

前述したように、小テストの合計点ではAとBが同一点数で8割以上、Cは7割、Eは7割弱、Dは6割であった。平均で見ると、AとBは10点中9で、Cは7.8、Eは7.2、Dは6.6であった。ここに表1、2で示した指導案における英語の間違いから、文脈や表現としては不適切だが、文法的に大きく間違っているとは言えない、「不適切な単語」を除いて、どのような変化があったのかを見ると、教育法IIIでの指導案1回目ー2回目ー3回目での間違いは、Aは6-2-1、Bは2-2-4、Cは1-4-2、Dは1-0-0、Eは1-1-5であった。小テストが開始した教育法IVでは、指導案1回目ー2回目での間違いはAで9-3、Bは17-10、Cは表示不可、Dは3-6、Eは6-3となった。Aは小テスト前の教育法IIIでも回を重ねるごとに英語の間違いは減少している。Dに間違いが極度に少ないのは中学一年生の2もしくは3

つ目の単元を行っており、活動自体が少ない教案となっていることも大きな要因である。BとEについては、むしろ3回目で間違いの数が一番多くなっている。

小テスト導入後の模擬授業の順番は、1回目はB、D、E、C、Aと行い、2回目はC、B、D、E、Aで行った。Aは模擬授業を毎回最後に行なっており、学生の性格に加えて、小テストの影響が最も大きく見られると考えて良いだろう。Aの場合は間違いは大きく減少している。Bの場合は模擬授業の1回目は一番目に行っているため、小テストの影響は比較的小さいと言えるだろう。その後、6回の小テストを経て、間違いが半分弱になっている。Eはどちらの場合も半ばくらいに模擬授業を行っており、指導案、小テストと共通して目的語が脱落している間違いが見られたものの、こちらもやはり間違いは半分減少している。ファイル紛失のため、数値を出すことができないCを除けば、Dが唯一、指導案での英語の間違いが倍増している。DはBに次いで、最初の方に模擬授業を行っており、小テストによる意識が及ばないこともあるが、Dが模擬授業に選んだのが中学1年生の3つ目の単元であり、小テストの内容との乖離が進んでしまったことが考えられるだろう。実施した小テストは毎回返却し、コピー等をとっていなかったため、どのような間違いがあったのかが不明であるため、指導案での間違いとの比較ができない。

また、この授業では小テストを行い、間違いを指摘したものを返却するにとどめているが、Approaches and Methods in Language Teachingで教師からのフィードバックとして挙げられているように、教師からの指摘を受けて、訂正して完成させる(122)、という段階を踏むことで、間違いを繰り返さないという意識を作り出すことができるだろう。しかし、模擬授業後に小テストを実施し、返却された小テストを訂正する作業は90分の授業時間では困難であり、学生は教科書を持っているため、宿題にするのも意味がなくなってしまう。

今回の研究から、小テストの導入により、程度の差はあるものの、大半の学生が指導案作成時での英語の間違いが減っていることが

わかり、一定程度の英語表現、文法についての注意喚起が可能であると言えるだろう。

しかし、対象となる学生は教員免許を取得するために教育法の授業をとっており、また教育実習を目前に控えていることから、通常の英語授業を履修している場合の学生とは意欲が異なると考えられるだろう。

今後は、教育法の授業で現在行なっている小テストの記録を取り、指導案での英語の変化にどのように反映されるのかを調べていきたい。また通常の英語授業での小テストではどのような変化が生じるのかについても見ていきたい。